
銀魂 solitary person

夜三

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀魂 s o l i t a r y p e r s o n

【Nコード】

N 3 4 9 7 T

【作者名】

夜三

【あらすじ】

真選組二番隊隊長を務める立華^{たちばな} 菜葉^{なのは}は、日々男だらけの真選組で大奮闘!!

でも、菜葉は自分でもうすっかり忘れきった思い出したくない記憶がある――。

菜葉の悲痛な過去とは？そして銀さんとのつながりとは？そして恋。苦しくても、孤独な感情につぶされそうになっても、「まけたくない」。

この気持ちを胸に、懸命に生きていく彼女の姿とんとご覧あれ!!!

紹介（前書き）

どーも初めまして！！夜三です！ヒャッホーオオオオオオ

初連載なのでとって

もテンションがたかいです。・・・スミマセン（-.-）

駄文ですがよろしく願いしますm（――）

m

紹介

どーも、前書きで書きました夜三です♪
あいかわらずテンション高いです♪

えゝこんなどうでもいいことは置いといて・・・（だった
らくなよっ！）知っている人もいると思いますが、これにはオリ
キャラがでできます。

今回はその紹介だけです・・・スミマセン（・・・）

名前 立華 菜葉 （たちばな なのは）

真選組二番隊隊長

性別 女

年齢 17歳

好きな物 甘いもの（とくに和菓子）、ゲーム、読書、面白い事
嫌いなもの 砂糖菓子、あんこ、ジャム、めんどくさいこと

誕生日 3月10日（O型）

武器 刀（気がむいたら違うものも・・・）

容姿 髪 色はライトブラウン（生まれつき）で、長さは腰の上ぐ
らいで仕事のときは結んでいて髪ピンをつけている。

瞳の色 茶色

顔 ふつうに美人。まだ、幼さがのこっている。

身長 167?

性格 読めばわかります（っておい！！）すみません（・・・）

刀の腕は沖田に並ぶぐらいで、小柄なのであいてをかわすのが得意。

仲間の呼び方

近藤〓 近藤さん、局長

土方〓 土方さん、副長

沖田〓 総悟

山崎〓 山崎

銀時〓 銀時、銀

新八〓 新八君、新八

神楽〓 神楽

年下以外だいたいはさんずけします。

大体こんな感じです。次からは第一訓です。

おたのしみに〜♪

紹介（後書き）

なのは「ちよと夜三！！あんた何回スミマセンっていつてるのよ！？」

夜三 いやぁ別にいいじゃん、減るもんじゃないしい（＾＾＾＾）

（笑）

なのは「うわーもうっむかつく〜とくにその顔文字！！」

夜三 ちょっとおこらないでよ今日はそんなこと言いたいんじゃないんだからなのは「っ〜っ〜！！・・・まあいいや」

夜三 この前書きや後書きではわたし夜三の今日あったことを話したいと思います

なのは「ん〜まっ、そういうことらしいからよろしくね」

夜三 よろしくお願いしますm（――）m

第一訓　いつもの朝？（前書き）

夜三　今日学校で運動会の組み立ての練習があつたよ

なのは　「えっ！もう運動会！？」

夜三　そうなんだよ・・二年前からさあ5月にあるんだよねえ・・

・そん　なによりっ組み立てが大変なの！！

なのは　（ん）・・とにかく頑張れってしか言いようがないわ・・・

）

第一訓 いつもの朝？

私は立華 たちばな 菜葉 なのは

こないだ、17歳になりました。

私は、真選組二番隊隊長を、勤めさせさせて、もらっています。

とても楽しく、充実した日々です。

でも、これから私のいや、私の中で何かが、くるい始めたのです――。

――ピピピピピピピピ……

「あーっ！……うるさいっ……！」

菜葉は、枕もとにある携帯のアラームを、荒々しく止めた。

チュンチュン・・

外からはすずめの鳴き声がし、窓からは太陽の光がさしこんでいる。

菜葉は、一分間ぐらいボーとしていた。

「・・ハア・・、そろそろ起きなきよ

ドオオオオオオオオン・・

「・・・・・」

朝っぱら鳴り響く近所迷惑な爆発音。最初はこの朝っぱらから鳴り響く爆発音には驚いていたが・・、もう慣れた。慣れてしまった。

菜葉は、起き上がり、んぐと背伸びをした。
そして布団を畳んで、ふちに寄せた。

そして障子を開けた――。

そのころ・・・

「つたく！！総悟ツ！なにしやがるっつ！！！！」

「まだ生きてたんですかい、ささつと死ねよ土方あ！！」
バズー力を持った沖田が、顔をしかめながら言う。

「てめえが死ね総悟オオオオオオ！！！！」
「死ね土方アアアアアア！！！！」

ギィィィィィン・・・

二人の刀が交わる音が響く。

先ほどの爆発音を聞いて集まってきた隊士達も、もう止めようがない。

「・・・・・・・・またやってんの・・・」

「うわぁ！立華隊長いつのまに・・・・・・・・！！！！！！」

ろっかに居た、菜葉に気づいた一人の隊士がおもわず叫んだ。

「・・・おはよう。顔あらに行きたいからどいて・・・」
まだ、寝間着姿のなのはが眠そうに言う。

「ちよっ・・・隊長！そんなのん気なこと言っ
てないで止めてくださ
い！！」

「・・・めんどく
s

なのはが、めんどくさいといいかけた、その時・・・

ドオオオオオン・・・！！

沖田がまた撃ったバズーカが、なのはの横をとっすりすぎ・・・

半壊した・・・半壊していた・・・。

菜葉の部屋が、半壊していた・・・。

それを見たのはは、しばらくそれをじっと見つめていたが、
だんと震えだした・・・。

うつ・・・ヤバい・・・！！！！！！

まわりにいた、隊士達がみんなそう思った・・・。

「つ・・・！私の・・・、部屋・・・、私の部屋があ・・・！！
総悟オオオオオオオ！！！！」

まだ、喧嘩している土方と沖田の間に菜葉が入って行った・・・。

第一訓　いつもの朝？（後書き）

夜三　　なのはあ、このあと土方と沖田に二週間ぐらい口きかなかつたんだって？

なのは　「だって何も置いてなかったところに玉があたって別に何も損害がなかったとは言っても、私の部屋めちやくちゃになったのよ！ー！」

夜三　　どうどう・・・（ーー）／

なのは　「・・・まあ、あの総悟が誤ってきたから許してあげたけど・・・」

夜三　　えっ！ー！あ、あの沖田が誤ったの！？

なのは　「そうっ！・・・まあ近藤さんに言われてしぶしぶだけど」

夜三　　沖田がねえ・・・（ーー）

なのは　「？どうしたのよ」

夜三　　いえ・・・。なんでもないです。

第二訓 戦隊ものや変身ものって、敵ってよく変身するまで待っててくれるよ

夜三 いやぁ・・・、来年学校卒業だっていうのに、私ってまだ
ほとんどの先生 の名前覚えてないんだよねえ（＾Ｏ＾）

菜葉 「・・・だめじゃん」

夜三 スミマセンm（――）m

あ、それと、この話は菜葉の部屋が壊されて一カ月ぐらい
たってます。

菜葉の部屋も、もう直っています。

第二訓 戦隊ものや変身ものって、敵ってよく変身するまで待っててくれるよ

「チッ、なんだよもう逃げちまったのか」

「・・・そうみたいですなぁ」

「せっかく来たのに・・・」

ここはかぶき町のとある喫茶店。

さきほど、ここで指名手配犯の攘夷浪士がいると真選組に通報があったので、こうして土方が一番隊、二番隊を連れて、そろそろやって来た訳である。

・・・だが、着いてみればもう喫茶店の店員達は逃げ去った、とかいわない。

「逃げてったって何に？」

そう菜葉が問う。

「そりゃあ、俺達からだろ」

土方が答える。

「いやぁ・・・、こちらら慎重にこちらに来てるんですけど。最近あんまり手柄たててないですし」

沖田が言う。

「ああ総悟、お前のせいだな」

沖田の発言で、土方はその時のことを思い出しちょっとイライラしてきた。

そう、今追っている指名手配犯は、あとちょっとで捕まえるところ、総悟がふざけて土方を転ばせた。

「あー、あれは総悟が悪かった」

「なんでい、菜葉まで」

その時あった事をほのぼのと語っている三人達に、一人の隊士が話かけた。

「あ、あの・・・隊長たち、周辺搜索しないでいいんですか・・・？」

「「「あ」「」」

そう三人が声をあわせて言う。

「あ、ああ、一番隊は二つに分かれて外の東側搜索！二番隊も二つに分かれて西側！監察は聞き込み！」

土方は大声で隊士達に命令する。

「「「「「はい！」「」」」」」

約20人ほどいる隊士たちが一斉に返事をする。

そして、隊士たちがぞろぞろと出ていった。

「さて、俺達はなにするですかい」

「帰って始末書しまつしよかくに決まってるだろ、始末書」

「始末書って何かくんですか？逃げられた、って書くんですか？」

そう言いながら、三人が喫茶店を出ようと自動ドアの方に体を向けた。だが、まだ近いてもいないのにガーと、開いた。

あっちから誰かが入ってきたのだ。
入ってきた三人組を見て、

「あ、」

と沖田がつぶやいた。

一方、その頃――。

土方に命令され、河原の方まで搜索しに来た隊士二名。

「はあゝ。副長達って、よくこつこつ時も、のんきに話してられるよな。」

「ああ、そうだな。・・・でも、なんだかんだ言って仲良いよな、
って副長と沖田さんは悪いか。・・・とゆうか、ちゃんと仕事だ仕
事!」

「そうだな。って、なんだかこころへんくさくね?」

「・・・たしかに、いつもこころへん見回りで通るけど、こんな
匂いしないぞ」

そう言いふと、河原の下を見た。

「・・・お、おい。あ、あれって・・・」

「・・・ああ!!死体だっ・・・て、あれはっ・・・。っ!!!・・・連
絡しろっ、副長達につ、あれは指名手配犯しめいてはいはんの死体だ!」

「わ、分かった・・・!!」

今、時の歯車が動きだす――。

第二訓 戦隊ものや変身ものって、敵ってよく変身するまで待っててくれるよ

菜葉 「やっと話らしくなっ たわね」

夜三 まあね！

菜葉 「別にほめてないけど。でも私ってあんまりしゃべってない・
・・」

夜三 ・・・・スミマセン駄文で・・・。

第三訓 顔は見たことあっても名前は分らない時ってよくあるよね（笑）（前書

夜三 第三訓でやっと、本篇では主人公の銀さん達出てきまゝす

菜葉 「出番少ないけどね（笑）」

夜三 それを、言わないでっ（泣）！

あと、銀さんごめんっ！！

第三訓 顔は見たことあっても名前は分らない時ってよくあるよね（笑）

喫茶店に入って来た、三人組を見て沖田が、

「あ、」

と、^{ひび}呟いた。

「おー、おー。なんかパフェ食いに来たら、見たくもねー面^{めん}があんだけど」

「なんだヨ、またお前らアルか！ちゃんと働けよ、税金泥棒^{ぜいきんどろぼう}！！」

「ちよっ・・・！銀さんに神楽ちゃんも、そんなケンカ売するような事、言っちゃだめですよ！！！」

もう皆さんお気づきだと思っが、そう、入ってきたのは万事屋^{いっ}向である。

「人前で何言つてやがるっ！だいたい俺らは、攘夷浪士じょういつりやうしがここに居るって、通報受けて来てんだよっ！！」

土方がキレ気味きみで三人に向けて言う。

「はあゝ！だったら何なんでボーと、つつ立たってるアルか！！」

「お前ら、本当は暇なんじゃねえか？」

「はあ！今帰ろうとしてたんだよ！！」

ぎゃーぎゃーと、予想どおり喧嘩けんかしだした土方、銀時、神楽たち。

本当に、周りの迷惑めいわくも、考えて欲しいものだ。

そんな事を、人に言えない（自分も人の事言えないので）沖田は、ぐい、ぐいと服を引っ張られている事に気づいた。

「ん？」

横を見ると、菜葉が服を引っ張っている。

「なんでい？菜葉あ」

「あのさ、え〜と……。あの人達だれ？」

菜葉は、まだ言いあっている土方達の方を見て沖田にそう、問かけた。

（ああ、菜葉は知らないんだっけ）

第四訓 顔は見たことあっても名前は分らない時ってよくあるよね（笑）・続

夜三 返信遅れてすみません！！

第四訓 顔は見たことあっても名前は分らない時ってよくあるよね（笑）・続

「あゝ、こないだの」

菜葉は納得した。
なつとく

「あれでしょ、桂がスーパーマーケットに立てこもった時に、一緒に居た人達」

あの事件の時、菜葉率いる二番隊は、ほかの事件を任まかされていたため、その事件は沖田から聞いた。

その時居た、銀髪ぎんぱつの天パの男と、メガネの地味じみな16歳の少年と、天人（あまんと）のチャイナ娘が居て、三日間みっかかん託児所たくじじょで事情聴取じじょうちゆうしゅされていたと聞いたが全然知らなかった。

「でもこの人達、無実むじつだったんでしょ？」

「まあ、こいつらなら今でも捕まえても良い位なんだけどねえ」

「……どうゆう意味？」

そう問^とかけてきた、菜葉^とをチラリと見た。

そして、

「むかつくんでさあ・・・チャイナ娘・・・」

「は？なんで？」

沖田は、いやそうな顔をしてまだ喧嘩^{けんか}している土方達^{にら}の方を睨^{にら}む。

「なんとなく」

「・・・・・・・・」

沖田の応え^{こた}を聞いて呆^{あき}れたのか、大きく溜息^{ためいき}をついた。

「とりあえず私、喧嘩止めてくる」

「・・・別に、勝手^{かって}にやらせとけばいいんじゃないn

「いいわけないでしょっ！仕事^{しごと}中^{ちゆう}！-」

沖田の言おうとした事^{こと}を覚^{さと}って、即答^{そくとう}する。

そして、喧嘩している土方達に入っていく。

「ったく……。菜葉は真面目だねえ」

沖田はポツリと、そう呟いた。

第四訓 顔は見たことあっても名前は分らない時ってよくあるよね（笑）・続

夜三 菜葉あ！すごいよ！！

菜葉 「へ？な、何が？」

夜三 こ、この小説をお気に入り登録してくれた人が居たんだよ！一人だ

けど」

菜葉 「へ、こんな小説でも読んでくれる人居るんだ」

夜三 なにげに酷いよ、それ。

でも、本当に読んでくれている人ありがとう！！

菜葉 ありがとうございます♪

第五訓・喧嘩は売られたら、買うのが礼儀。

「ちょっと！土方さん、いいかげんにして下さい！！」

菜葉は喧嘩している土方の腕を引っ張りながら言った。

「・・・ああ・・・」

まだやり足りないような顔をして、菜葉の言うとおり喧嘩をやめた。

「あの、上司がすみません。今、私たち仕事中なので・・・邪魔しないで下さいね」

菜葉は万事屋と言っていた3人組にそういった。

「別にいいアルよ。二度と私たちの前に現れんじゃねえぞ」

「そーそー。俺らは喧嘩なんてしたかねえーんだよー、ホントは」
チャイナ服の女の子と、だるそうな銀髪の男の人が言う。

「ちょー！あんた達が喧嘩思いつきり振ってんじゃないですかー！」

二人の挑発的な態度に、眼鏡の男の子がつっこむ。

「ちっ！！」

土方は思いっきり舌打ちをした。

第六訓・災難って突然やって来る（前書き）

すみません（焦り）

忙しくて、一か月更新できませんでした。

今日は事件がやっと起きるので、お楽しみにっ ♪

菜葉「お楽しみにっ ♪」

第六訓・災難って突然やって来る

菜葉達は、やっと店を出た。

「土方さん、人が沢山居るところで喧嘩するのはやめて下さい。恥ずかしいし、みつともない、」

「仕方ねえだろっ！喧嘩売られたんだからっ！！」

「おいおい、土方よお。菜葉の言ってる事正しいんだからしかねえだろイ」

「つんだと、総悟！！おめーだってあのチャイナ娘に会ったんびに、喧嘩してんじゃねえか！！」

（あゝ、ゝゝ、うるさい、ゝゝ）

この喧嘩はもう聞き慣れているが、うるさい事には変わりはない。

良い年して恥ずかしくないのだろうか、こんな街中で沢山人がいる

「ああ、、、、見つかった、死体で、、、」

『!!!?.』

「え、し、死体で、、、ってなんで、」

「土方さん。説明して下さい」

「俺にもそんなに細かい情報まだ分んねえよ!!、何者かによって刃物で切られて出血死らしい、、、とにかく行くぞっ」

死んでいた攘夷浪士の状況は、

・隊士二人が発見した時には、もう死んでいたという。

・すぐ、攘夷浪士は救急車で病院に搬送はんそうされたが、傷が深く出血大量で死亡が確認された。

「なんで、、誰が、、？」

「おおかた大方、仲間割れか、辻切りにあったのだらう」

隊士に呼ばれた近藤が菜葉の質問にまじめに答える。

だが、その近藤の頬ほおには、殴られたであろう痣あざがある。

（ああ、またストーカーやったのか、局長）

と、隊士達の頭によぎったが、もう誰も声にだして突っ込まない。
というか、今はそんなところでは無い。

ただ一人のぞいて。

「あ、あの先輩。どうしたんですか局長、事件に巻き込まれたとかですか？」

「ん、あ、お前は先週きたばかりだから知らねえか」

ゆうついつ聞いたのは、北^{きた}型^{がた} 武^{たけ}。
先週、第二番隊に配^{はい}属^{ぞく}された、北型だった。

「うん、なんていうか、恋愛さただよ」

「へっつ、れ、恋愛ですか!？」

(へっ局長って、好きな人いるんだ、喧嘩でもしたのかな)

北型は、純^{じゆん}粋^{すい}にそう思っていた。

第六訓・災難って突然やって来る（後書き）

はい〜どうでしたか？

オリキャラの北型が出て来ましたね^^

菜葉「北型ってどうゆう人なの？」

それは次話で、、、

／／／オリキャラ／／／

今回は、前の記事で出て来たオリキャラ紹介をしようと思います
^^

名前 きたがた たける
北型 武

年齢 17歳

誕生日 7月7日・かに座

血液型 O型

体重 50kg

真選組二番隊に所属。しよぞく まだ下っ端。ば
ぶき 武器 普通の刀

好きな物 動く事、寝る事、本を読む事
嫌いな物 苦い物・辛い物、ねずみ。

く見た目く

身長 155?

瞳の色 茶色

髪型 黒髪で髪型はご想像におまかせします。
顔 幼さがのこっている。顔はかわいらしい。

性格 読んでたらわかります。

近藤が、剣の腕をみこまれ真選組に入った。

剣の腕は菜葉達にはおよばないが、他の隊士よりもすぐれている。
背が低く、小柄なためこまかく動いて相手をたおす。

だが、背が低いのがコンプレックスでもある。

小さくかわいい事もあり、隊士達からは可愛がられている。

仲間の呼び方

近藤〓 局長、近藤さん

土方〓 副長、土方さん

沖田〓 沖田隊長、沖田さん

菜葉〓 立華隊長、立華さん
たちばな

銀時〓 旦那

神楽〓 神楽さん

新八〓 新八さん

先輩は全員さんずけで、初対面しょたいめんの人にもさんずけする。

まあ、こんな感じです♪

今後どう活躍してくのか、お楽しみに♪^^。

第七訓 たまに思う。宇宙って本当にあるのだろうか、と。(前書き)

夏休みに入って、最近あんまり運動してない気がする、、、、(泣)
(うーん。

た、、体重が、、、、(泣)。

第七訓 たまに思う。宇宙って本当にあるのだろうか、と。

空が奇麗きれいに澄みきって、気持ちの良い春風はるかぜがふいているまさに春日和はるびよりとゆう今日の天気。

そんな青空の下。

ファミレスを出てすぐの人通りが多い通りに、結構めだつ三人組が歩いていた。

「あゝ、食った食ったあゝ。久し振りだぜえゝ、チョコパフェ食ったのゝ」

「私も、久し振りにあんなに沢山たくさんうまいもの食ったアル！」

「いや、神楽ちゃん。むなしくなるからやめてね、ゝ、ゝ」

皆さんお気づきのとおり、万事屋三人組である。

久し振りに依頼いらいがあり、収入しゅういが有ったため、銀時達はファミレスで腹はらごしらえをして来ていた。

そして今はその帰りである。

もうちょっと、ながい長居したかったが他の人たちの視線しせんが気になり、早々（そうそう）と出て来てしまった。

まあ、真選組の奴らとケンカしていたのだから他の客の視線は仕方がない。

「ったくよー、。なんか最近行く所行く所に真選組アイツらが居る気がするんだけど。

ホント迷惑めいわくだぜ、。」「

「ホントアル！ろくに食べれやしなかったネ！！！」

「いや、神楽。お前は食ってただる沢山」

確かに最近新八も、真選組とよく会うと思っていた。

こうゆうのを腐れ縁きずなって言うんだろぅな、と思う。
その時、ふと疑問ぎもんが浮かんだ。

「そういえば、真選組に女の人って居たんですね」

「確かにそうアルな、いっつもむっさい男どもしか見たことなかったアル」

「・・・・・・・・」

「けっこう奇麗きれいな子だったよね」

「まあ、私には誰も勝てないアルけどな」

「・・・・・・・・」

『？』

二人がさつき見た、真選組の女隊士の話をすると銀時は急に考え込むように黙ってしまった。

「・・・・・・・・？」

新八と神楽は顔を見合わせる。

「銀ちゃん、どうしたアルか？」

「、、！！。えっ、、と、、」

神楽に聞かれて、考えこんでいた銀時が顔を上げた。

「銀さん？どうしたんですか、、？」

新八が銀時に問とかける。

銀時は、ちょっと戸惑ったような顔をしてこういった。

「え、いや別に。なんか昔会った奴に似た顔だったなあ〜っと思
って」

「え??? 会ったこと?」

「で、でも。もうそいつ、事故で死んじゃってるから、」

「え・・・、」

事故で死んでしまった、と聞いて新八と神楽が顔が申し訳なさそう
な顔になる。

「じ、ごめんなさいっ！銀さん。そっ、その、嫌な事聞いち
やって・・・、」

新八が申し訳なさそうに謝る。

「別に謝る事ねーよ。結構前の事だし、」

銀時がうつむきながら言う。

「「「・・・」」」

すこし重い空気になってしまった三人。

その時、

「キヤーーーーーあああ!!!」

「「「!!!」」」

たぶん女性の悲鳴だろう。それが遠くから聞こえてきた。

三人も互いに顔を見合わせ、うなずくと悲鳴が聞こえた方に走りだした。

第八訓 ペットって結構世話が大変

すみません！！

第八訓を間違えて、「銀魂 形を無いものを手に入れるのには、とても難しい」に更新してしまいました！！

結構3時間以上かけて書いたし、結構今後に重要だと思いますので、「銀魂 形が無いものを手に入れるのには、とても難しい」でみてください。

あと、八月六日ぐらいまで塾と宿題ずけになりますので、しばらく更新できそうにありません（<―>）

がんばってください、というコメントを頂いたんですがとても嬉しかったです。

こんな小説でも読んでくれているんだと思うと、すっごく自信がきます^^

まだまだ、小説書くのはへたですがよろしくおねがいします！！

これだけで終わるのもなんなので、第九訓の予告でも、、

第八訓は、残酷描盛り沢山だったんですけど、九訓は菜葉が万事屋に行つて銀さん達と仲良く？と言つか知りあう話です。

久し振りに明るいはなしです。

なんか最近、死体だとか血とかグロテスクな感じだったんで、、

菜葉は甘い物好きって設定がやっと使える、、って感じです。

よろしくおねがいします♪

第九訓 犬派か猫派か聞かれたらなんだから言って、猫派（前書き）

家に居る生後13日位の猫がかわいすぎる？
家族全員メロメロです。

第九訓 犬派か猫派か聞かれたらなんだかって、猫派

「
」

菜葉はかぶき町の商店街で、鼻歌を歌いながら歩いている。

ライトブラウンの色をした長い髪。

そしてその髪に付いているのは、すきとおるような水色のピン。

きれいな花の模様もようが描かれた着物。

そして、その腰には刀。

刀さえ持っていないなればどこにでもいそうな、普通の女の子なのだが、

菜葉が真選組隊士である以上、出かける時は刀を常備じょうび携帯していないなくてはいけない。

住宅街での殺人事件から一週間。

立て続けに続いていた事件も、ここ一週間は何もおきていない。とゆうわけで、やっと休暇きゅうかをもらえた。

（今日は朝の天気予報で、通り雨がくるって言ってたっけ、）

なんて事を考えながら歩いていった。

「いらつしゃいませー。あつ！菜葉ちゃん」
「こんにちはー」

菜葉が来ていたのは、行きつけのだんご屋。
最近仕事が忙しく、なかなか来れなかった。

「菜葉ちゃん久しぶりねえ。最近仕事忙しいの？」
「そうなんですよー田村さん。ホント大変です」

田村とは、この店を経営している40歳くらいの女性のことだ。

菜葉がこの店の常連客とゆう事もあり、もうすっかり仲良くなった。

「菜葉ちゃんいつもので良い？ここで食べてくでしょう」

「あ、今日は雨ふりそうなので、持ちかえりをお願いします。だんごはいつもので」

田村は、「そう」と笑顔で言うとタッパーに、みたらしだんごや三色だんごをつめていく。

菜葉は待っている間、ふと窓の外を見るとまさに雨がふりそうな雲

が視界に飛び込んできた。

そして、だんごが入った袋をお金を払い受け取った。

「本当にふつてきそうね雨。菜葉ちゃん大丈夫？傘かさかそうか？」
「大丈夫です。走って帰りますんで、ありがとうございました」

そう言くと、菜葉は小走りで外に出た。

「あゝ、ふつてきた」

ついに雨がポツポツとふつてきてしまった。
それがだんだん強くなってゆき、どしゃぶりになってきてしまった。

（駄菓子屋も行きたかったけど、また今度にしよう）

なんて事は思っているものの、本当にどしゃぶりになって来たので
雨宿りできる場所がないか、走りながら探していた。

そのとき――。

『ミィミィ』

「!？」

動物の鳴き声がした。

「猫だ」

横を見ると、ダンボールの中にまだ産まれて一週間ぐらいしかたっていないさそうな子猫がいた。

捨て猫だ。

雨にうたれて、結構衰弱けいじやくじやくしている。

(・・・・・・・・どうしよう)

このままじゃ、確実に死んでしまう。

雨の中、一人ぼっちで。

そう思った瞬間、ほおっておくことは出来なくなった。

とりあえず、雨のあたらない所に連れて行こうとダンボールごと持った。

そして、近くのスナックだろうか、看板には『スナックお登勢』と

書かれている。

とりあえず、その店の前の屋根みたいなところに入った。

猫はミーンミーンと鳴いている。

動物が好きとゆう事もあるが、捨て猫や捨て犬などを見ているとすごく心が痛くなる。

誰にも助けてもらえず、助けてといくら鳴いても誰も助けてくれない。

そして、孤独いそくの中誰のぬくもりも感じられずに死んでいってしまう。これがどんなに辛い事だか、この猫こを捨てた人は分っているのだからうか——。

「っ——！！」

一瞬、頭かぶの奥がジーンと貧血ひんけつみたいな感じになった。

最近、たまにこんな感じになる。

それより——。

(この猫、どうしよう、、、、、)

まずこの事を考えなくてはいけない。

とりあえず、持って来てしまったが真選組では飼えない。

誰かに飼ってもらうにせよ、飼い主が見つかるまでどこに置いてこ
う。

もんもんと菜葉が考えていると、ガラガラッとうしろから引き戸お
開ける音がした。

「店の前で何やっているんだい？」

そつ言いながら店の中から出てきたのは、黒い着物を着て片手には
煙草^{たばこ}、とゆうちよつと怖そうな50歳以上ぐらいの女性。

「あ、すみませんっ！あの・・・ちよつと雨宿りさせてもらおうと
、」

菜葉はペコリと頭をさげた。

それを見て、店から出て来た女性が、

「雨宿りぐらいいいよ。よれよりアンタ、びしょぬれじゃないか。
タオル貸してやるから店は言っ
て来な」

あ、今気がついたら自分もびしょぬれになっていた。

「あ、ありがとうございます」

お言葉にあまえて、店の中に入ることにした。

店の中は、カウンターや普通の机などバーって感じ、とゆうかスナックらしいのでバーだ。

さっき店から出て来た人はお登勢というらしい。

菜葉はカウンターの席の方に座らせてもらい、タオルを受け取った。髪をふくのに、髪ピンが邪魔じゃまなわけはずし懐ふところにしまった。

「どうしたんだい、その猫」

床に置いた、猫の入っているダンボールを見てお登勢が話かけてきた。

「この猫、捨てられていて、。それで、家じゃ飼えないのでどうしようかと・・・」

「つまり、飼ってくれる人を探しているのかい？」

「あ、はい。そんな感じです」

だつたら、とお登勢が言った。

「ここの二階に、万事屋つてゆうなんでも屋があるんだ。どんな事でもやってくれるよ」

「ほんとうですか!？」

「まあ、金さえ払えばだけどね」

お金の事はどでもいい。真選組儲かるし。
この猫この飼い主がみつけてくれるのなら、ゝゝ。

「じゃあ行つてみます!このタオル、洗ったら返します!!」

菜葉はお登勢に礼を言い、猫を持って万事屋に向かった。

第九訓 犬派か猫派か聞かれたらなんだかって、猫派（後書き）

第九訓の予告で、銀さん達と知り合うとか書きちゃったんですが、

出てきませんでしたね、、、、。

ごめんなさいつつつ！！！！

次回は必ず出てきます！

第十訓 仔猫って、一日の半分近く寝ているんだよ。あ、知ってた、（前書

今日はすっごく短いです（＜―＞）

第十訓 仔猫って、一日の半分近く寝ているんだよ。あ、知ってた、

ザアアアア――。

「あ、降って来ましたね」

そう新八は呟いた。

彼が居るのは万事屋。

毎朝、新八はここに来て洗たくやら掃除そうじをやっている。

やりたくてやっている訳ではないが、ここに住んでいる奴らがやらないから仕方なく、、、。

そう思うと、溜息ためいきが出てくるのであんまり考えないでおこう。

さっき書いた奴らとは、とうぜん銀時と神楽である。

「新ハッ！。私まだこの小説で、全然出て無いのに読んでる奴らに悪いいんしょーあたえるのやめてヨー！」

そう、ソファでねそべりながら言っているのは、酢昆布をくわえているチャイナ服に頭をおだんご結びをしている少女、――
――神楽。

「そうだぞうぱつつあん。ホントこれ以上出番少なくなったらどうしてくれるの？」

と、だるそうに言っているのは、こちらもソファでねそべりながら週刊少年ジャンプを読んでいる、銀髪の天然パーマの20代の男性、

――坂田銀時。

「なんで僕が悪いみたいになってるんですか、、
神楽ちゃんもこんな小説でも読んでくれる人の事を奴らなんて言っちゃだめだよ、

それに出番が少ないのは僕のせいじゃなくて、作者のせいですよ」

新八が言っている事は正しい。（ごめんね、銀さん達、、、by
作者）

ザアアアア――！！

雨の勢いがだんだん強くなってきた。

「すごい勢いアルな、雨」

窓から見える雨雲は、とっても分厚い。^{ふあつ}

「朝起きた時はまだ晴れてたアルのに、」

「通り雨って天気予報で言ってたからすぐ晴れるよ」

神楽の言葉に、むくりと体を起こしながら銀時は言った。

新八が、よく覚えてましたねと聞くと、

結野アナが言ってたからな、百発百中と得意げに言う銀時。

こんな感じのいつもの万事屋の会話。

『ピンポン』

「「「あ」」」

と、三人の声がはもった。

「おいおい依頼か！？はーいはーいすぐに出来ーす！ー！」

久し振りの依頼のため、銀時がすばやく玄関にむかう。

一応、新八と神楽も銀時の方に行く。

ガララッ——！

銀時は、玄関げんかんの鍵をはずし勢いよく引き戸を開けた。

「……………あ……………」

引き戸を開けた所に立っていたのは、————菜葉。

お互いの顔を見て、しばしの沈黙ちんもくが続いた。

第十訓 仔猫って、一日の半分近く寝ているんだよ。あ、知ってた、（後書

短いですね、（・・・）

30分くらいしか、かけていない、

第十一訓（前書き）

やっと、話数が二けたになった、
、
（ハニハ）
♪

第十一訓

ヤベーよ、何であいつここ来たの？

てか、アイツに超似てるんだけど意味分んねー！！！！

と、銀時はトイレの中で悶々（もんもん）と考えていた。

何故こんなことを考えているかとゆくと、時は十分前にさかのぼる
。

「・・・・・・・・あ・・・・・・・・」

「「？」」

（どうしたんだろう銀さん）

銀時が「あ」と呟いたまま、立ちすくんでいる。

新八と神楽からは、客の顔が見えない。

「銀さん？どうしたんです……」

あ、、、、、。

ええええええええええええええええ。

こ、この人って、この前の・・・。

第十二訓 いちご牛乳っておいしいよね（前書き）

すみません。

第十一訓が短いどころじゃすまされないぐらいの短さでしたね、。

題名も入れてないし・・・。

ホントごめんなさいっ！

第十二訓 いちご牛乳っておいしいよね

そこに立っていたのは、菜葉。

この前銀時が、昔会った奴に似ていたと言っていた少女。

それと――。

『もう死んじまってるから』と、言っていた。

新八はどうしよう、と思っていた。

昔の事をめったに言わない銀時が、口を滑らして言ってしまった。
その時の顔が、ちょっとひきついていたのも新八は見ていた。

トラウマのはずだ。

新八は銀時と玄関に立っている少女と何があったかは知らないが、
玄関で立ちすくんでる銀時の背中に、ハンパないくらいの汗をかい

てるのがよく分かる。

こんな感じでみんな黙りこんでいると、菜葉が口を開いた。

「あ、あの～。ここって万事屋って聞いたんですけど、、もしかして今日休みでしたか？」

「うえっ、休みじゃねーよ。万事屋は年中無休だから一応」

うえっ、とみつともない反応をしたことに銀時は後悔した。

「あの、依頼があつて来たんですけど……」

「依頼っ！依頼なら入ってくれっ、新八一お茶出せお茶」

依頼と聞いて、銀時が正気にもどった。

「あっ、はいっ！」

新八は返事をする、台所に入って行った。

「おかまいなく」

菜葉は言つと、雨でぬれたぞおりをぬいだ。

（ここって、あの時の人たちの店だったんだあ。びっくりしたあ）

なんて思いながら。

「おい神楽、この子奥に連れてって接客しててくれ。
銀さんちよつと便所行ってくる」

「銀ちゃん接客て何すれば良いアルか？」

てきとーにやつとけ、と銀時は言つと便所に入つて行った。

神楽は、

（しかたないアルなー）

なんて思いながら、菜葉を奥に連れて行った。

一方便所に入った銀時は、、、。

ヤベーよなんでアイツここに来てるの!?

てか、あいつに超似てるんだけどーーーーー!!

と混乱していた。

何であいつが生きている?

あの時あいつは死んだはず。

でも、ここに居るし…。

ゆゑ、ユレーイな訳ないよな……!

銀時が悶々と考えていると、トイレの扉がトントンとなった。

「銀さん。いつまでトイレに入ってるつもりですか?

お客さんが待ってますよ」

扉の前から新八が、長くトイレに入ってる銀時を心配して来たようだ。

「お、おう。今出るよ」

銀時は、トイレを使ってないが一応水を流した。

トイレから出て来た銀時は、もう普段の銀時に顔が戻っていた。

「あの、銀さん大丈夫ですか？」

新八が銀時に聞いた。

「だいじょーぶだよ。だいたい地球にどれだけ人が居ると思っただ。」

似ている顔の二つや三つあるだろ」

いつもの口調で銀時は言う。

新八は、いつもの銀時にもどった事を確認してホッとした。

でも、内心銀時はこう思っていた。

そつだよ、あいつはもう俺のせいで死んじゃったんだ。

でも――、本当にあいつなら、、、。

ずっとあの時の事を後悔してきた銀時にとって、この事がトラウマ

だった。

なんで助けてやれなかったただ自分は――。

銀時は、もしアイツだったらと希望を抱いていた。

第十三訓 定春でもふもふしたい。(前書き)

なぜか、この小説のアクセス数が異様なまでに増えていた、、、、、。

機械の故障？

第十三訓 定春でもふもふしたい。

「こっち着いてくるヨロシ」

「うゝゝ、うん・・・」

銀時たちが戸惑っている一方、菜葉もすごい戸惑っていた。

（なに、この人たち・・・）

万事屋で猫の里親探ししてくれると思い来てみたものの、この人たちは、よく分らないがなんか土方さんとか総悟とかと仲が悪い？みたいだった。

それだけでも気まずいのに、なんか玄関で私の顔みて固まっていたしあの天パの人。

なんで私の顔がそんなに珍しかっただろうか、とゆうかあの人の銀髪の方が珍しいでしょ・・・。

「どうしたアルか、ボーっと突っ立てないで早く来るアル」

「え、うん」

なんかこの子アルアルいってるし、。

天人だろうか、オレンジっぽい髪に青い瞳にチャイナ服。
普通にみれば可愛い女の子だ。

さっきお茶入れに行ってくれた人は普通の人っぽいけど……。

良く分からない人達だ……。

小さい頃から近藤さん達に知らない人には着いてっちゃダメとか言われてたけど、まさに今役立つよねこの言葉。

まあ着いて行っただけで、私がここに来ただけで。

チャイナ服を着た女の子にこつちと言われ着いてきた部屋は、
真ん中に一つのテーブルをはさんでソファが置いてあり、奥には
なんか社長が座ってそうな机と椅子。その横には赤いテレビ。

「普通の部屋」だ――。

「ワンッ!!」

「うわっ!」

大きい犬の吠え声にびくりと菜葉の体が震えた。

え…何これ、とゆうかこの巨大動物。

い、犬？

第十三訓 定春でもふもふしたい。(後書き)

めっちゃ中途半端&短く終わってすみません！

そろそろ寝ないと怒られるので、。。

第十四訓 旅行って行くのがすごく疲れるから現地では思いっきり遊べない(前

題名が長いですね。

深い意味はないんですけど、今週旅行行っと思った事です(^^ゞ

あと、菜葉の背の高さ変更しました！

158?から167?にかえました(<|>)!

さっき設定読み返してたら、158?ってひくっ!!!

ゝゝゝゝと気がつきまして、

沖田のちよつと低いぐらいが良いなーと思いましたので、

167?にしときました

第十四訓 旅行って行くのがすごく疲れるから現地では思いつきり遊べない

その犬は、自分よりはるかに大きい犬だった。

背丈は自分より10センチ位高く、体格も人間なんかよりもはるかに大きい。

でも、顔は大きな目でかわいらしいし、毛も真っ白で綺麗だ。

つまり菜葉の好みの犬…だけど、

「あの…この犬大きすぎない？」

「定春はいつも沢山ドックフード食べるアルからな！」

（ドックフードあげただけじゃ、こんなに大きくなる訳ないでしょ！）

菜葉は、笑顔で無邪気に答えるチャイナ服の子に心の中で突っ込む。

たぶん天人なんだろうと心の中で処理しとく事にした。

菜葉はソファ―に座っても良いと言われたので、ストーンと座った。

ホント、さっきから驚いてばかりだな…なんか本当に心配になってきた。

「ワンッ！」

ビクッ！

また真っ白な犬…定春と呼ばれていた犬がこっちを向いて吠えた。

体が大きい分、普通の犬とは吠え声はるかにでかい。
体がビリビリするし、。。。

しっぽは振ってはいないし、でも警戒している様子も…あるかどうかよく分らない。

「コラッ！定春。お客に吠えちゃダメアルよっ」

酢昆布わ食べ始めたチャイナ服の女の子に叱られ、定春はちょっとションボリしている。

クーンと鳴いて可愛い。

（やっぱり犬は可愛いのが一番だね、この犬もこちよつと小さか

つたら素直に可愛いと思えるのに…)

そんなことを考えていた菜葉は、ふとチャイナ服の女の子が持っている酢昆布をみて呟いてしまった。

「水川さんの所の酢昆布だ」

チャイナ服の女の子が持っていたのは、雨が降っていなければ行くはずだった水川さんのやつている駄菓子屋の酢昆布だった。

「お前も酢昆布好きアルか!？」

チャイナ服の女の子が目を輝かせて急に食いついてきた。

「うん、私も酢昆布大好き!!」

この子もおかしが好きなのだろうか？
いきなり食いついてきたので少々ビックリしたが、自分もおかしは大好きなのでここまで笑顔で聞いてくる子は初めて…に決まっているのだが。

職業がらし方ないんだが、。。。

「水川さんの所の酢昆布が一番おいしいアルっ!!」

「あ!私も、水川さんのところの酢昆布って他の所と違って、味にキレがあるって言うか、他の所と違うんだよね」

「あ、でも、谷さんの所も他の所と違う味でおいしかったアルよ」

「えっ谷さんの駄菓子屋って？」

あちこちの駄菓子屋をめぐり歩いてきた菜葉でも、谷さんがやって
いる駄菓子屋は知らなかった。

「知らないアルか？複雑な場所にあるから分りにくいかも知れない
アルね。」

今度一緒に行くアルか？」

「うん！！絶対行く！！！」

こうして私は神楽と仲良くなっていた。

第十四訓 旅行って行くのがすごく疲れるから現地では思いっきり遊べない（後

今回は神楽と仲良くなる話でした

いそいで書いたので、脱字や意味が分らない所がありましたらお知らせください。

第十五訓 猫ってあつとゆつまに育つ（前書き）

お久しぶりです!!

第十五訓 猫ってあつとゆうまに育つ

銀時達が戻ってきた時には、菜葉と神楽はとても仲良くなっていた。

好きなお菓子の話や、あそこの駄菓子屋がおいしいなど、話すとすぐ意気投合した。

こんなにお菓子や食べ物の事でしゃべったれるのはこの子ぐらいだ、と菜葉は思った。

そして、その二人の光景を銀時と新八は目を丸くして見ていた。

いくら神楽が初対面でも気軽に話しかける性格とはいえ、ほんの五分位でこんなに仲良くなるものだろうか？と思えるほど、楽しそうに話していた。

「あ、銀ちゃんと新八やつと来たアルか。遅いアル！」

銀時達が居るのに気が付いた神楽が言う。

でも神楽の顔はいつもと違って、満面の笑みだった。

そんなに話すのが楽しかったのだろうか。

神楽の隣に座っている菜葉は、銀時と新八を見て座ったまま、軽にお辞儀をした。

「ああ、すまねえ」

銀時は神楽の言葉に軽く答えると、菜葉の前のソファに座った。眼の前にいる菜葉とうまく目を合わせれない。ぎこちこない銀時に菜葉はよく分らない人だと思った。

「お茶です」

「あつ！ありがとう」

菜葉は新八の出したお茶を礼を言い受け取ると、一口飲んだ。温かくておいしい。

菜葉はさっきまで走っていたせいで、かわいた喉を潤した。

「今日はどんな依頼でいらっしゃったんですか？」

おなじみのセリフで銀時は菜葉に聞いた。

「あの、この猫を飼ってくれる人を探してほしいんです」

菜葉は、自分の腕で抱えていたダンボール箱の中を銀時達に見せた。そこには、ミーと小さな声で鳴いている子猫が居た。

「この猫って捨て猫…ですよね？」

あまりに小さい猫を見て、新八は驚いている。

「かわいそうアル。こんな小さいうち捨てられて」

神楽も弱々（よわよわ）しい猫を見てそう言う。

「この猫の里親探しをすればいいんですね」

銀時が猫を見て、直球にそういった。

なんでこんなにそっけ無いかとゆつと、さつきから銀時の思考回路がすごいことになっていたからだ。

（こいつ俺の事知らないのか？こないだあつたから知らない訳じゃねえけど、あんどきが初対面だと思ってる？昔の事は覚えていないのか？）

などの疑問で頭の中に駆け巡る。

（もしかして、本当にアイツじゃなくて別人なのか、）

そう思えば楽なのだが、生きていて欲しいと希望をもっている自分もいる。

（あゝ、ホントどうしたら良いんだよぉ）

銀時は心の中で叫んだ。

第十五訓 猫ってあつとゆうまに育つ（後書き）

更新遅くなって本当に申し訳ありませんでした・・・（<―>）

あ、あと、ブログの方もたまにはのぞきに來て下さい。

第十六訓 近藤さんってかっこいいよね？やさしいよね？（前書き）

更新おくれました！！（＜―＞）

久しぶりに真選組！！

第十六訓 近藤さんってかっこいいよね？やさしいよね？

万事屋にいる菜葉は、要件も言ったことだし連絡先もおしえたしそろそろ帰ろうと思いだめたころ、真選組では・・・

～真選組～

真選組で廊下を音をたてながら早足で歩く男が一人。
ろっかのギスギスとゆう音は、なんとなく怒りが混ざった音だ。

「あゝ！つたく、総悟の奴また仕事サボりやがって！！
帰ってきたらしばいてやるっ」

「うおっ！」

近藤の部屋にバンツつと勢いよくあけた障子の音が響く。
書類の整理をしていた近藤は、ノックも無くいきなり障子を開けられビクリと体がはねた。

あ、近藤の部屋に入ってきたのはみなさんもうお気づきだと思うが、真選組副長土方十四郎である。

土方の顔をみれば、いつものようにイライラした表情がすぐ目に入った。

「な・・・なんだ、また総悟の奴仕事さっぼってんのか？」

土方がさつき障子を開けながら言っていた言葉を思い出し一応聞く。
聞くまでもないが。

土方は「ああ」とドスのきいた声で答えながら、手に持っていた書類と近藤あてにポストに入っていた手紙を渡す。どうやら土方はこれを渡すために来たらしい。

近藤はそれを受け取る。

「そつえば今日つてやけに静だな」

耳をすませれば聞こえるのは外の車の音や鳥、風の音くらいでいつもと違い随分静だ。

「ああ、菜葉はどっか出かけてるし・・・、総悟の奴はサボってどっか行っただけだな!!」

総悟という単語に怒りをこめて言う土方に失笑を向ける近藤。

「まあまあ、そんなに怒るな。欠陥切れるぞお」

「けどよっ、近藤さん!」

納得いかないという表情で言う土方に近藤はまあまあと言い、

「あとで総悟にはちゃんと言っとくから、な!」

子供をあやすように言う近藤に不満を抱きつつ、「分かった」と言い部屋を出て行った。

(まったく・・・。総悟はしかたがないなあ)

帰ってきたらちゃんと言い聞かせようと思いながら、書きかけの書類が置いてある、

机の前にある座布団の上に座った。

土方から受け取った書類と手紙に目を落とす近藤。

ネットで何か頼んだ訳でもないのに、手紙が来るなんて珍しいと宛先のらんを見る。

「お!」

宛先をみて近藤の顔に笑みがうかんだ。

第十六訓 近藤さんってかっこいいよね？やさしいよね？（後書き）

短いですが、おお目にみてください・・・。

おやすみなさいです。

第十七訓 毎日アメーバブログで日記書いてるから見てネクロマンサー!!!(前)

更新おくれましたあああ!!!

第十七訓 毎日アメーバブログで日記書いてるから見てネクロマンサー！！

「万事屋」

「じゃあ、そろそろ帰りますね」

菜葉はもう要件がすんだので、帰ろうとした。

そのとき――、

ツルッ

雨で濡れた靴下をはいていた菜葉が、キュッと水とフローリングがかすれた音がして宙に浮いた（↑じゃあツルっじゃねえだろ）。

「「「あ」「」」

万事屋三人の声はもった、と同時に…

ドスンッ！！！！！

菜葉はおもいきり、三人の前ですっ転んだ。

い……いたい。

私は転んだ時、最初に思った感想はこれだがコンマ1秒後に三人が見ていた事に気がついた。

はっ、、はっずかしいiiiiiiii！！！！

「……………」

部屋に沈黙がはしる。

たぶん三人も、気をつかって話かけてこない。

だから、よけいなんか恥ずかしい。

今三人は、どんな顔をしているのだろうか……

きっと変な眼で見ている事はまちがいないだろう。うん。

だって普通、目の前で十八歳の人間がすっ転んだら私でも『この年

で普通転ぶ？（笑）』とか思うもん！！

さて、どうやって切り出して良いのだろうか、、

『転んじやった！テヘッ』

なんて少女漫画みたいな事言えるわけねえだろオオオオ！作者あああ（泣）。

こんなふうに、頭の中で作者呪っている菜葉に対し転んだのを見ていた万事屋三人は、

第十七訓 毎日アメールバブログで日記書いてるから見てネクロマンサーー！！（後

すいません…。

なんかパソコンにエラーが出てしまって、二時間くらいかけて書いたのがおジャンになってしまって、ここまでしかかけません…。ほんとにすみません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3497t/>

銀魂 solitary person

2011年11月17日00時58分発行